

読み手の知識を反映したリーディングスキル評価手法の開発

荷方邦夫（金沢美術工芸大学 美術工芸学部 准教授）

1 研究の背景と目的

本研究は、特に文章理解・言語理解の観点から、児童・生徒の読みの能力（リーディング・スキル）測定におけるいくつかの問題を検討するために行ったものである。近年リーディング・スキルの測定に関する研究がいくつか行われ、社会的な関心を寄せている。本研究は、文の理解が文章の統語（文法）的機能に基づいて成立しているだけではなく、語の意味や理解の程度、あるいは文章のテーマや取り扱っている領域も含んでおり、スキルの測定もその認知プロセスを考慮しながら検討すべきということである。この前提と仮説に立ち、本研究では児童・生徒の読みのスキルの測定に関する問題を検討することとした。

2 実施した研究（調査1・2）とその結果

研究では、同じ文章の仕組みをもちながら文章のテーマや理解に必要な知識の領域が異なり、問題の理解の難易度が異なると思われる2つの文を作成し、文の係り受けや照応（指示語が何を指しているか）を正しく示すことができるかという問題を作成した。調査1では考案された20テーマについて、理解が容易と思われる文章の問題20題（係り受け10題、照応10題）と理解が難しいと思われる文章の問題20題（同様）からなる20の問題対を作成した。大学生にこの問題対の解決を実施し、実際に解決の成績が異なったり、問題の文章の難易度が異なると判断された問題を抽出した（7題の問題対）。

（難）学校においては、児童生徒等の安全の確保を図るため、当該学校の施設及び設備の安全点検、児童生徒等に対する通学を含めた学校生活その他の日常生活における安全に関する指導、職員の研修その他学校における安全に関する事項について計画を策定し、これを実施しなければならない。

（易）花火をするときには、周りが安全かどうかを確かめるため、花火をする場所に燃えやすいものがないか、花火で遊ぶ子どもたちが後片付けも含め花火で遊ぶときの注意を理解しているか、先生たちが子どもに花火をさせるときに危険な目にあわないように準備しているかなどのマニュアルを作り、これを読んでいる必要がある。

図1 調査で使用された文章の例

調査2では中学生を対象に調査1で得られた7対の問題を実施した。この結果、背景となる知識領域の難しさの違いによって読みの問題の成績が異なる結果が得られたこと、また学習の段階によって知識の豊かさが異なると思われる学年の違いによっても読みの成績に差が見られるという結果が得られた。

これらの結果が示すことは、以下の2点である。第一に、われわれの文の理解は背景となる知識に大きく影響され、統語（文法）的なスキルはこれに依存しやすいこと。第二に、リーディング・スキルの測定を行う場合には、読み手の知識や知識領域の理解を前提とした測定方法の配慮が必要であることである。

3 研究結果の議論と今後の課題

研究の結果は、われわれが文章を理解するとき、十分に文章が示す世界を表象できるよう理解が構築されないと、文そのものの理解が妨げられるため、これを前提として読みの能力の測定は行われなければならないことが示された。また、このような点に配慮がなされないと、リーディング・スキルの測定は、単に学習者の学力などに影響を受け、純粋に測定を行うことができないという問題があることが指摘できる。この課題への取組みは今後とも重要であると考えられる。

教育において読みの能力の学習を大きく引き受ける国語教育についてもいくつかの示唆がある。これまでも読みのスキルの学習については様々な形で議論してきた。しかしながら、テストのような量的な評価をもとに学習活動を築くことについては、必ずしも積極的ではなかったと言える。国語教育研究における基礎的読解力・基礎的言語能力の軽視を説明する一つの考え方として、国語教育の中で、読めるというのは読むための知識があらかじめあることを前提にしている、あるいはあらかじめ知識がない場合でも学習活動を構築することが可能であることを前提としていることがあるように思われる。このことを踏まえ、国語教育はその教育の中で、読み手の知識や世界に対する理解に十分配慮した取り組みを進めていくことについて積極的であるよう提言する。

共同研究者：石田喜美（横浜国立大学教育学部）